

心はなぜ形而上学の問題となるか

——ベルクソンと西田を手がかりに——

沖 永 宜 司

はじめに

心と身体とがいかにして因果的な関係を持つかという問題は、物質としての脳からなぜ意識が生じるかという問題、さらには、原子の空間的な延長とその運動とがなぜ感覚になるのか、という問題に置き換えられる。この問題は、実証的には解決不能という意味で形而上学的方法である。実証には観察データが同一の概念枠の中で処理される必要があるが、延長と運動の性質と、感覚と思考の性質とは、扱われる枠がまったく異なり、それらを共通に観察する方法が原理的にないからである。そこで以下では、物質と精神という対立項の設定が、すでに別々の概念枠への抽象化を経ていると見なす立場を検討する。同じ概念枠内での事柄同士の関係は、観察され得る。しかし、それぞれが別の枠に属する観念同士が直接に作用し合うという考え方は、も

ともと背理である。このとき謎は、脳という物質からどのように精神が生じるか、という事象の側にあるのではなく、「物質」と「精神」という互いに別の概念枠に属す観念を作った上で、なおふたつを結びつけようとする私たちの操作の側にあることになる。

そうした見解としてまず、物質と精神とをともに純粹な観念と見なしたベルクソンの方法を見る。「物質と記憶」では、物質としての脳作用は行動にとって有用である働きに限られ、この有用性から外れた所に、記憶、精神を位置づける。そこで物質と精神との対立が、行動に関わる純粹知覚と、関わらない純粹記憶との対置へと置き換えられた仕方を確認する。次に西田の場所論における実在の述語的な「限定」を、物質や精神ですでに実在の抽象と見なす立場として再解釈する。そして「限定」以前の場所を、ベルクソンの行動に関わる有用性以前の状態と

比較する。

さらに私たちが物心の対立以前を存在論的な根源として考えるに際して、ベルクソンが實在論や觀念論という認識論上の対立の解消を、唯物論や唯心論という存在論上の対立の解消に結びつけていった道筋を確認する。そこでは「物質」や「精神」以前の次元に出現する實在の姿とは何かが吟味されなくてはならない。そこで、純粹持続や生命の跳躍という、ある意味実体的な何かとして生命を扱ったベルクソンと、概念上絶対に対立するもの同士が、矛盾的自己同一となる所に生命を見ようとした西田の立場とを対置させる。そして後者における、概念性の離脱の徹底性を含む問題点について最後に確認する。

一 「物質と記憶」での脳と精神

物質としての脳からなぜ精神が生み出されるのか。ベルクソンの基本的な考えは、「脳の状態が表すのは、精神状態のうち、空間の移動による運動に置き換えられることのできる、小さな部分ではない」と私は考える。(MM p.6)という言葉に示される。これが奇妙に響くのは、意識の出所は、脳という物質的、空間的實在であるという前提を私たちが持っているからである。しかし、この前提を逆手にとり、むしろ物質の方が延長、運動という形式に限定された現れであって、この現れ以前を精神と見なすのがベルクソンだと理解することもできる。

これに関してベルクソンは精神活動を芝居に喩える。空間化

される脳の働きは「役者の動き」にすぎず、脳は「パントマイム」であって、芝居の意味、つまり精神の本質はそこにはないと言っているのである(MM p.6)。しかし、脳という物質に現れない精神という、なぜ私たちが不可解なものと思うのだろうか。それは、物質の属性である量と延長のみを實在とし、精神の属性である質と非延長とをそこから除外する、私たちの思考様式によるのではないか。これだと、延長化されない精神は決して實在に含まれず、質は虚構となる。ベルクソンはこの様式を排し、精神を延長に現しながら、他方で物質に質を取り戻す。こうして見ると、延長と量しかない物質の方が、實在を抽象した主観的産物にすぎない。そこで、主観的な心象の質を持ちながら、他方で「物質」とも命名される「イメージ」が意義を持つてくる。

まず、「私たちにとって、物質とは(イメージ)の集まりである」(MM p.)と言う。ベルクソンの「物質」は、延長、質量といった、第一性質だけを特性とはしない。反対に、特定の觀念や、色、味など、主観的な第二性質のみを本質とするものでもない。イメージからすると、第一性質も第二性質ともに抽象物にほかならない。イメージが、「觀念論者が表象(representation)と呼ぶもの以上ではあるが、しかし、實在論者が物 chose と呼ぶもの以下である、ある種の存在——《物》と《表象》との間の中間に位置づけられた存在」(MM p.)と言われるのはこの意味である。これは、外界に表象の原因として存在

していると考えられている「延長物」でもない。イマージュとは第一性質と第二性質とを併せ持つ、ある種中立的な実在であり、それを根本に据えることは、知覚や観念の主観的性質を失わないまま、かつ第一性質としての物理的性質を受け入れることでもある。

「したがって常識にとつては、対象はそれ自身で存在し、そして他方では、対象はそれ自身において、私たちが目にするままの生き生きとした色彩を持つている…この対象はひとつのイマージュである、しかしこれは、それ自身で存在するイマージュなのである。」(MM p.2)。

第一性質のみが実在だとすると、実在は色彩を持たない。すると、なぜ色彩のない第一性質から色彩が生じるかという疑問が生じる。たとえば機能主義的理解においては、色彩は識別の手段にすぎないとして、実在から除外される場合もある。しかし色彩それ自身の存在は、私たちが自然に直観するものであり、この自然の直観の実在性を否定すべき理由はない。そこに照らせば、物質の「延長」、精神の「非延長」という区別も、抽象となる。現にベルクソンはこの区別を、「習慣的な錯覚」によって「われわれの悟性」が作り上げたものと見なす。しかもそれが「ディレンマを指定する」(MM p.53) ことになるという。物質から意識が生じ、延長から非延長が生じることの謎も、同様の「ディレンマ」からの帰結だろう。すると心身問題とは、実は表象と表象との関係であることを、実在同士の関係だと思

い込むことで生じる問題となる。無関係な表象同士に関係を見出そうとすること自体、背理となる。⁽²⁾

こうした意味で、実在を抽象化する前の、常識と直観とを重視し、抽象化の解除によって形而上学の問題をなくそうとするのがベルクソンの方法だと言える。しかし彼は「物質と記憶」では、失語症理論などの心理学説を主要な手引きとしており、概念枠そのものを主題としてはいない。それに対して西田は、こうした対立概念を、述語論理による実在の限定に見出した点で、この枠自体を主題とする傾向がより強い。またベルクソンは自らの立場について「はつきりと二元論的 nettement dualiste」(MM p.1)と述べる面もあり、この点では純粹経験や場所の一元性を貫き通した西田とは異なる。さらにベルクソンは少なくとも「物質と記憶」において、西田と異なり主客の未分は殆ど言わない。しかしイマージュの性質を徹底化させると、延長と非延長との区別ばかりではなく、「対象」と主観との区別も意味を失って来ざるを得ない。こうした問題意識から、次に西田が物質と精神との対立をどのように扱ったかを見たい。

二 「頭で作った神秘」

確かに西田は、形而上学の問題解決を直接の目的としてはいない。しかし、物質や精神も含めた世界把握の根本概念をも、場所の限定の結果と見なす西田の議論は、形而上学の問題の原因をすでにこの概念の使用に見出す立場として考えられる。

「生命には空間的境界はない。活力論者の如く環境を離れた有機体の考から出立しても、また機械論者の如く有機物を物質の一部分となす考から出立しても、生物学者の生命の考を構成することはできない。人はこれを神秘という。しかしそれは我々の頭で作った神秘である。世界を機械的物質の世界と考えるから、それが神秘となるのである。」
〔論理と生命〕 論集Ⅱ 一九二頁。

ここで「我々の頭で作った神秘」という言葉に注意したい。機械的な物質が生命を組み立てることは不可解である。反対に、物質とは無関係に独立した活力も、非物質的な何かという背理を作ってしまう。そして、それらがどう「生命」を形成するかはおおさら説明できない。しかしこれが「神秘」なのは、世界がおかしいからではなく、もともと「頭で作った」にすぎない物質や活力を、考察の出発点とすることに起因すると西田は考える。それに対して生命とは、「関係を見ることが生命を見ること」(同所)と言われるように、物質でも、実体化された精神でもない。それは、両者が分けられる以前の、形成的な作用の場そのものを生命と見なすことである。しかしそのような生命は、唯物論からは物質の機能的な循環としてしか映らず、反対に実体的な精神はそうした関係に関与できない⁽³⁾。物質の視点からこの作用の場を見ても、決定された物質の運動としか見えない。逆に精神実体の視点は、決定性を破る純粹な自発性を考える限り、精神は物質と接合できない。どちらの立場も、実

在としての作用の場を把握できない思考様式を持つてしまっている。

場所の「限定」とは、概念枠による實在の不透明化として理解できる。確かに概念や知覚対象は、この枠組みがなければ成立しない。しかし、西田はこの限定を経たものを實在とは見えない方向に向かう。むしろ逆に、限定を取り払うことで實在が露になるという考えが強い。

「無の場所における有の場所の限定ということが知覚ということでなければならぬ。而して限定せられた有の場所、即ち知覚の範囲に留まる間は、力の世界を見ることはできぬ。……力の世界を見るには、かかる限定せられた一般概念を破って、その外に出なければならぬ」(「場所」論集Ⅰ 一一四頁)。

「知覚」とは、概念枠を経て可能となるにすぎない。逆にそうした「限定せられた一般概念を破」り、概念枠以前に引き戻ることが強調される。この破りによって明らかになるのが「力の世界」だが、これはたとえば熱や運動などから算出される数値としての物理的エネルギーではない。それは先の「生命」と同じで、物的なものとしても、さらに精神的実体としてさえ規定されず、両者の対立がそこにおいて無意味になる何かである。しかもこれは、両者の対立を前提とした上で、それらが合することではない。

この概念枠以前へ戻することは、「相反の世界から矛盾の世界

に出」(同所)ることとされる。この「相反」と「矛盾」とはどう違うのか。西田は「この転回点は最も考うべきであると思う。」(同所)と、その重要性を強調する。先には、「有」に

おいて「知覚」が成立し、そこに「相反」も成立することが述べられた。これは何と何かとの対立が成り立つ世界、つまり対立項同士を関係させる概念枠が不可欠になる。しかし「力の世界」では、この「力」と何かとの「相反」さえ成立しない。なぜなら、「力」を、別の、力をまったく持たない何かと対立させる概念枠そのものがないからである。これが「矛盾の世界」の重要な性質のひとつだと考えられる。この概念枠が不成立になる仕組みこそが、西田が「転回点」として重視したものと考えられる。概念枠や対立の不成立こそが「矛盾」の条件であり、そこに「直観」の意義が浮上する。私たちは対立物をそれぞれまとめて対象化はできる。しかし対立さえ不成立の諸事項を一緒に対象化することは不可能である。しかしこの不可能性に徹するところで、直観は意義づけられるのである。

では概念枠以前から、なぜ概念枠は生じたか。ベルクソンは行動への有用性にその成立を見た。この点、西田では理由は明確にされない。ところで、有用性が知識の根拠なら、この知識の適用範囲はその有用性の領域に限られるはずである。その知識は、有用性の範囲で役立つ目的で作られたからである。しかし一度誕生した知識は、元来の適用範囲を超えて用いられようとしても気づかれない。しかもそれを究極の問題に適用させよ

うとするから、形而上学の問題は生じる。つまり問題解決の方向は、この知識以前に戻ることになる。それをベルクソンがどのように行ったか、次に確認したい。

三 知識以前と形而上学以前

ベルクソンが「物質と記憶」において、物質や精神を人為的な概念と見なしたのは、心身問題のような形而上学の問題の解決を動機のひとつにしていたからである。この概念化は、物体を延長、精神を非延長と見なす私たちの思考が生じた理由についての考察から明らかにされる。

まず感覚を「非伸張(inextensive)」とする考え方については、それを「誤謬」(MM p.60)と明確に規定した上で、この誤りの出所を、精神の属性を非空間的性質に限定したデカルト的推論に見る。「空間の役割と延長の本性についての間違った考え方」(MM p.60)というのはそれである。これが、形而上学の謎の出発点であり、精神と物体との区別もここから生じたというわけである。反対に、この推論が誤りであれば、謎が生じる根拠もない。現にベルクソンは、感覚や思考をつねに、デカルトが思考とは区別した、延長や空間性と一体のものとして見る。

次に観念論と實在論との対立の出所への批判である。私たちは、観念ではなく物質が第一にあると見なす、實在論的な見方を当然視するところがある。他方、現象はすべて私に知られる現象であるとする観念論的な見解も否定はできない。観念とそ

の原因としての物質とを区別し、私たちが知覚するのは觀念だが、その原因として私たちの外部に知られざる物質が存在するというロッキの構図が有力になったのはそのためである。反面、私たちがバークリの見解に対して抱く違和感は、私の中にだけあるはずの觀念や知覚を、私の外部の存在条件にまで拡張した点にある。外部は内部からは独立して存在するというのが、私たちの前提だからである。しかしベルクソンは、外部の物質をすでに第一性質と見なして物の本性とし、内部に現れる第二性質を物の現象とする構図自体を批判する。

「簡潔に言うとして私たちは、觀念論と實在論が行った、物質をその存在とその現象との間で分離すること以前の物質を考へるのである。」(MM p.3)。

ここからすると、第一性質を實在として現れを単なる現象とする考えは、實在の表現ではなく、逆に抽象的な区分を實在へとすり替へることにほかならない。⁽⁴⁾これは存在と現象とを区分する私たちの前提への根本的な批判でもある。そこで、この第一性質「以前の物質」、つまり第一性質と第二性質との区別を伴わない「物質」とは何かが問題となる。それは物理法則に従属するのか。それともこの「物質」は物理法則以前なのか。たとえば、知覚と存在とを同一視するバークリの言葉をまともに受け取れば、物質はその存在ごと知覚である限り、まったく恣意的に動き、知覚に現れるものが従うべき物理法則はない。

ここでベルクソンは、物質の法則と精神の恣意性との中間的

なスタンスを採る。バークリは中間より精神側に物質を持つてきたために、物理学の成功を説明できず、宇宙の数学的秩序を偶然と見なさざるを得なくなったという(MM p.3)。つまり物理法則がすでに第一性質のみを前提にするなら、その段階で實在は抽象されたことになる。反対に精神実体も實在の抽象である限り、当然、物は主観の恣意だけでは動かない。「物質」は半分觀念であるが、それは精神と物質という区別以前である。元來人間は、この区別以前のままでの實在に触れており、しかもそこを常識とするという点が重要である。

しかし、この直接の實在は「常識 sens commun」と言われながら非常に捉えにくい。たとえば空間は分割可能と私たちは考へるが、そうした空間はすでに数学的な延長として概念化された空間なのである。概念の枠にあまりに慣れすぎた私たちは、それなしにものを考へることは不可能なのである。そこで最後に、西田が直接の實在を「矛盾」と見なさざるを得なくなった理由を検討し、形而上学の問題発生以前の世界の姿に接近したい。

四 「矛盾的自己同一」と生命

物体的延長を實在としても、非延長の魂を實在としても、生命は成立しない。これはベルクソンでも西田でも共通した見解だが、そこを徹底的に「矛盾」として打ち出したところに、西田の生命論の特徴がある。生命の本質の捉えがたさは、たと

えばベルクソンの純粹持続とクオリアとの違いにも見られる。私たちはクオリアを、客観的な脳作用や身体機能に現れない、純粹な感覚として位置づけようとする。しかしそうしたクオリアは、物理的なものを実在と見なす限り世界の中に位置するところがない。にもかかわらず、存在しないと私たちの生き生きとした実感は説明できない。以上はクオリアをめぐる解決困難な矛盾である。これはクオリアが、物理的客観的出来事では「ない」という形で、物理的な出来事概念を前提にしているために生じる困難である。しかし、物理的世界と生き生きとした実感との矛盾は、世界把握の概念枠によって作り出されている矛盾とすれば、この枠の除去によってクオリアの謎は消滅する。ベルクソンに言わせれば、この概念枠を前提とするクオリアは「にせ物の純粹觀念 *contrefaçons des idées pures*」(MM p.276)であり、主観的な構成物の一種にほかならない。それに対して「直接に与えられているもの」は、この構成による実在の限定をはずしたところに現れ、クオリアさえもここには該当しない。西田の「矛盾的自己同一」は、物質とクオリアのように、概念枠によって作られた「矛盾」が、枠の消滅によって根こそぎ消滅することである。しかもこの矛盾の解消は、この概念枠からは絶対に思考不可能であるゆえに、矛盾は「絶対」だったのである。

この自己同一的狀態を示す言葉に「行為的直観」がある。ここには行為と直観とのふたつの性質が含まれているが、これと

反対の言葉を作るとすれば「思惟的分析」になるだろう。思惟が出来事を対象として外部から観察するのに対して、行為とは出来事の内部に密着する。また分析は対象を要素化して説明する。それに対して直観は、全体を基本単位として描き出す。全体が最初で最後であるから、これを構成要素とする外側も存在しない。「行為的直観」において、内と外という区分は無意味である。つまりここでも、形而上学の問題の原因は実在の側ではなく、それを分割した側にあつたことになる。しかも、矛盾が概念枠による限定から生じるなら、絶対的に矛盾するものの同一化には、限定は絶対無と言われる次元にまで開放されなくてはならない。有と無とは、この開放の次元でなければ同一化しない。

「非連続」と「連続」も、この絶対矛盾の一例である。非連続は客観的な物質、連続は主観的な精神と置き換えてみることもできる。これらはより上位の概念によっては包括されない。両者が絶対に限定されない無へと開放されることによって、それらの絶対的な対立の根拠が無効になり、ひとつの全体として同一化するのである。「非連続の連続の構成作用」が「絶対の無の限定」(「行為的直観」論集Ⅱ 三三二頁)だという言葉は、環境—個体の生命の現実が、その内と外とが区別されない全体として自己展開、自己超出することとして理解できる。行為的直観は、矛盾が矛盾となる以前へと透徹することで、矛盾の成立条件自体を改変させる。これは概念の抽象化ではなく、実在

全体の自己改変である。

このような改変は、「絶対知」という「立場なき立場」としても表明される。ある対象が絶対だとすれば、絶対は主観が知る対象とすら言えない。絶対が知られば、絶対は絶対ではないものと対置され、絶対の「外」が生じてしまうからである。しかし絶対は全体であり、その限りで絶対の外はあり得ない。絶対無、超越的述語面にはまさに「外」がないという特徴がある。これは、知の対象では、その対象とそうでないものとが区別されるのと好対照である。同様に、絶対矛盾するもの同士の間、絶対媒介も、知の対象ではなく、述語的概念化を超えている。ここにおいて、絶対媒介、絶対矛盾の自己同一は同一の地平に立つことになり、しかもそれが「具体的實在」の姿となる。そして全体の自己展開としての生命も、この系譜に連なる。それは知が働く枠組みそのものを創り出す形成作用である限り、知の枠組みではなく、それ以前の根底となる面を持ち続けなければならないからである。

おわりに

ここまで、心身問題が、概念と實在とを取り違えたことから生じているという思想を、ベルクソンと西田を例に探ってみた。ベルクソンはいわゆる物質や精神を、各々独立に抽象化された「にせ物の純粹觀念」と見なし、本来の物質を純粹知覚、精神を純粹記憶に置き換え、両者の関係を探った。純粹知覚は、物

質であると同時に知覚であり、そこに質的な要素が含まれる。しかし他方でベルクソンは自らの立場を「二元論」とも明言しており、その点は西田の場所的な一元論とは区別された。

またベルクソンは、全体としてのイマージュから行動に必要なものが抽出される、一連の過程を知覚と見なす。ここで概念化は行動への必要性によって生じると考える。それに対して西田は、概念化を實在の分化とは見なすが、それがなぜ生じるかを言わない。こうした違いの一方、イマージュは知覚の源泉であるのみならず、物質と精神とが分かれる以前の、存在論的な源泉でもあった。こうした認識論と存在論との重層構造において、ベルクソンと西田には共通点が見られた。

ただし、主客の合一や、無限定を徹底させた無という考え方は、ベルクソンにはほとんどない。これは、合理的な世界の背後の、合理的ならざるものについての扱い方に大きく関わる。ベルクソンはイマージュや純粹持続を、物質や精神以前の原初的實在と見なす向きもあるが、それらを端的に所与として出発する。それに対して西田は、限定を受けた知識を包むのが場所としつつも、場所自身は根拠づけられず、合理性を超えていることに着目する。「實在と考えられるものは、その根底に何処までも非合理的と考えられるものがなければならぬ。」（『無の自覚的限定』論集Ⅰ 二五五頁）という主張は、単なる選択肢のひとつではない。ある合理的な實在の合理性を成り立たせる形式が正しいか否かの判断は、その合理性に含まれない。西

田が心や物という合理的概念の根底に無を設定すること、これに通じる。

MM: Bergson, Henri, *Matière et Mémoire. Essai sur la relation du corps à l'esprit*, 54^{ed}, Paris: Presses Universitaires de France, 1953.

論集Ⅰ:『西田幾多郎哲学論集Ⅰ』岩波書店、一九八七。

論集Ⅱ:『西田幾多郎哲学論集Ⅱ』岩波書店、一九八八。

(1) 現代の心の哲学は、その身体論において、非延長と考えられていた精神を、身体の中に延長として見ている。その一方で、物質が量的広がりだけではなく、質も持つという考えに否定的であるのは、このベルクソンの立場からすると、論理的に中立ではないことになる。

(2) 実在の抽象化によって私たちの認識が成立するにしても、この抽象化以前の實在そのものとは何かが問題になる。ベルクソンはそれを、「イメージと観念、非延長の後者と延長の前者のあいだ」に位置する「一連の中間的な状態 *une série d'étas intermédiaires*」だと言っている。しかもこれは「感受の状態 *les étas affectifs*」とも言い換えられている (MM p.53)。つまり「感受」が、物質と精神との分裂以前からあることになる。この意味でベルクソンは、世界が精神的な感受性と物とに対して、存在論的に中立なことを示している。

(3) 概念枠を除去された生命は、何にも限定されない。西田の「形成作用」はここに展開する。それに対して西田は、ベルクソンを、「エラン・ヴィタールが物質を突破して進むと考うべきはな」と批判する (論理と生命「二〇五—六頁」)。この「エラン」が機械的決定性を破るものとしての生命ならば、決定性に対立する生命の実体化だからである。では実体化されない「形成作用」とは何か。西田では、

それが環境—個体全体の自己限定になる。それは個体が一般法則に従属するでも、個体が恣意的に一般性を破るでもない。環境と個体とが未分のまま、それ自身において自己展開することである。それは決定性に従うことでもなく、反対に決定性を破ることでもない。むしろ決定性と自発性との区別の方が、「形成作用」から生み出されると言える。

(4) 「機械論の哲学者 *les (mechanical philosophers)*」に反対して、バークリが、物質の第二性質は少なくとも第一性質と同じくらい実在性をもつと明言した日に、哲学には大きな進歩が実現した。(MM p.54—55) という記述も、第一性質は第二性質と同様、すでに実在そのものではないという考えにつながる。

(5) 実在を第一性質に限る場合、第一性質からなぜ第二性質が生じるかという問題が生じる。さらに観念とその原因とを区別するロッキの構図は、現象と本体との区別を前提としているが、なぜこの区別があるのかは不問である。ふたつを分けたからこそ、それらがなぜつながるかが形而上学の謎となるのである。ベルクソンの「常識擁護」は、「常識」においてふたつを分ける理由はないという立場である。

(おきなが・たかし、哲学・宗教学、帝京大学教授)